

会社と全く違う異文化の人々との交流で問題を解決。お金ではない価値を示せるようになりました。

二期受講生 友枝敦さん  
ザ・東京タワーズ管理組合理事長  
(養成塾受講当時)



長年IT業界で研究開発や事業企画をしていることもあり、問題や情報を論理的(ロジカル)に解決するのが好きです。し得意としています。もともと自分は、「何かやらかしたい。自分のアイデアで何かをやり遂げたい」と思う、そんなタイプです。

会社ではCSV(共通価値の創造)プロジェクトがきっかけで社会のことを考えるようになりました。CSV、つまり社会的なニーズや問題に取組み、社会的価値を創造することが自社の事業価値や競争力の創造にもなるというものです。そんな時、理事の仕事が巡ってきました。身近な社会課題であり企画者魂に導かれマンションコミュニティに深入りすることになりました。普通に暮らすだけなら特に関わらなくて済むことなのに、あえて。そうしたら、コミュニティにおいて何のためにやる



のかという共通の目的を持つて目指すことは案外と難しいわけです。

そこで養成塾の登場です。「これは自分(たち)の課題に使えるツールではないか」と思いました。

養成塾で得た「ソーシャルキャピタル(社会における人の信頼関係・つながりを表す概念)」の概念や調査結果が、コミュニティやプロジェクトでの議論において強力な武器となり、ポジティブな共通意識を生み出すことができるようになりました。そして、ビジョンの大切さを発信することにより、周りも変わってきました。

た。WHYではなくHOWの話こそが大切なのです。養成塾の修了生たちは、やる気あるマイノリティの集まりですからね(笑)。これからも情報の共有の場として、相談や知恵の出し合いの場としてネットワークを築けていたらありがたいと思っています。

今、私はマンションの管理組合の理事長になりましたがこの先は自治会とタッグを組んで、住民主導によるマンションに基づくマンションの自治と管理の仕組み作りに挑みます。自分はやらなくとも自動的により良くなっていくような仕組みにすること、それが最終的な目標であり美学です。

(平成二十九年インタビュー)

## 出会う人に

## 勇気づけられるから

## こそ続けていける

二期受講生 佐久間保人さん

佃月島新聞 編集長

R60 中央プロジェクト

会社員時代は労働組合や会報誌づくり、また障がい児福祉のボランティア活動などもやっていました。そのような経歴からのつながりもあり



現在は佃月島に住む人達のためのコミュニティ機関紙『佃月島新聞』の編集発行を手掛けています。弊紙は当初、佃リバーシティ自治会の機関紙『天空新聞』として始まりましたが三号で廃刊。しかし当時の上司に復活を頼まれ、エリア拡大などを試みるうちに発行部数も五千部から一万二千部に拡大しました。そうこうしているうちに自治会からの持ち出し運営も限界を超え、民間の会社に営業や広告を譲渡するようになりましたが、どうしても営利目的となってしまうため、広告が多くなり地域情報の掲載スペースも小さくなってしまいました。そこで二〇一八年四月より地域を佃・月島に限定することで経費を下げ、より地域に密着した非営利のコミュニティ紙として、サポーター制度を取り入れながら一万部を発行することにになりました。なんとか



読者記者の協力も頂戴して継続していますが今後どうなっていくか、というところです。このあたり、佃・月島はまだまだ古い歴史や文化が残っている一方で、再開発がどんどん進み、転入者も増えています。それに伴い、住人達の地域の行事や取組への興味や関心は非常に強く、若者や女性も多くなっています。土地や街のエネルギーを肌で感じる事ができて、住人の喜びや想いに触れられる。これが自分の活動の大きなモチベーションや勇気になっています。また、佃月島新聞とリンクして

『R60 中央プロジェクト』を展開しています。団塊世代の人が持っている生き方や仕事術などを地域（中央区）に活かしていく会です。

地域コミュニティのことは時折やってくる行き詰まりに辞めてしまおうか“と思うこともあります。そのような中、養成塾では他の自治会：特にマンシヨンの自治会の考え方に触れたことも大きかったですね。誰かの支えがあつて続けられる、という気持ちは強くありますし、今後さらには広報や情報発信を仲間と真剣に考えて強化していきたいです。誰かに喜んでいただけるうちはやろう！という思いが「継続」の大きな秘訣です。個人の思いの手触り感のあるメディアだからこそ応援していただけるというのもありますしね。

（平成二十九年インタビュー）

・平成三十年度一部編集